

地震翌朝、原発敷地外に放射性物質 保安院公表遅れ

経済産業省原子力安全・保安院は3日、東京電力福島第1原子力発電所が東日本大震災で停止した直後の大気中の放射性物質濃度などのデータを公表した。

地震翌日の3月12日朝、1号機で最初に排気用の弁の開放（ベント）をする前に原発敷地外で炉心の激しい損傷を示す放射性物質が検出されていた。2ヶ月半も未公表だった。直ちに公表していれば事故の正確な実態把握や避難計画の検討に役立った可能性がある。

公表したのは地震直後の3月11～15日に、政府の原子力災害現地対策本部と福島県が測定したデータ。15日に保安院の担当者らが大熊町の緊急時対策拠点から福島市に退避した際に持ち出し忘れたデータを、5月28日に回収したという。

データによると3月12日午前8時30分過ぎに浪江町や大熊町で放射性ヨウ素や放射性セシウムを測定。核燃料が1000度にまで過熱しないと出ないとされる放射性テルルも検出された。

東電は12日午前10時17分に、1号機の格納容器の圧力を下げ水素爆発を防ぐためにベントを始めた。今回の公表データは、それ以前に炉心の激しい損傷が原因とみられる放射性物質が建屋の外に出ていたことを示す。弁の故障や建屋の損傷などが早い段階から起きていた可能性がある。

保安院は12日午後に、原発敷地内で放射性セシウムが検出されたと発表。敷地外の放射性物質は13日以降の測定値しか公表していなかった。

新データは原子炉の異常がどのように進んだかを理解する手掛かりとなる。すぐに公表していれば事故の深刻度をより正確に把握し、避難地域を的確に判断するのにも生かせたとみられる。

保安院の西山英彦審議官は「意図的に隠すつもりはなく、情報を整理して公表する発想がなかった」と弁明した。福島第1原発事故を巡っては、政府が放射性物質の拡散予測を3月下旬まで公表しなかった。東電も5月28日に大量の放射線量の未公表データを明らかにするなど、透明性が不十分との批判が多い。

『DAYS JAPAN』Vol.9 No.2 2012 FEB 「原発事故報道・検証 3月11日 -- 12日（監修 広河隆一）」

58頁 [検証] 「**検証測定は事故翌朝から開始されていた**」を参考に

朝日新聞「プロメテウスの罠」前田基行記者（連載 2011.10.03 ~ ）
ここには驚くべき内容が書かれている。

福島県浪江町の津島地区は福島第1原発から30キロ北西の山あいであり、3月12日、原発10キロ圏内の避難指示によって、1万人もの人たちが避難してきた。学校・公民館・寺、そして民家にも泊めてもらった。菅野みずえさんの家にも朝から次々と人がやってきた。夜には25人になった。古民家を壊して新築した家、門構えが立派で敷地は広い。20畳の大部屋もある。避難者を受け入れるにはちょうどよかった。門の中は人々の車でいっぱいになった。

「原発で何が起きたのか知らないが、ここまで来れば大丈夫だろう」
避難生活のルールを決めて、寝る準備をする。

記事には次のように書かれている

外に出たみずえは、家の前に白いワゴン車が止まっていることに気づいた。中には白の防護服を着た男が 2 人乗っており、みずえに向かって何か叫んだ。しかしよく聞き取れない。

「何？ どうしたの？」みずえが尋ねた。

「なんでこんな所にいるんだ！ 頼む、逃げてくれ」

みずえはびっくりした。「逃げろといっても……、ここは避難所ですから」

車の 2 人がおりてきた。2 人ともガスマスクを着けていた。

「放射性物質が拡散しているんだ」。真剣な物言いで、切迫した雰囲気だ。

家の前の道路は国道 114 号で、避難所に入りきれない人たちの車がびっしりと停車している。

2 人の男は、車から外に出た人たちにも「早く車の中に戻れ」と叫んでいた。

2 人の男は、そのまま福島市方面に走り去った。

役場の支所に行くでもなく、掲示板に警告を張り出すでもなかった。

これは福島県の測定班だった。彼らは国に先んじて測定し、高濃度の放射性物質放出の実態を知った。しかし、県はこれを隠し、人々を被曝させたのである。……記事は続く

政府は 10 キロ圏外は安全だと言っていた。

なのになぜ、あの 2 人は防護服を着て、ガスマスクまでしていたのだろう。だいたいあの人たちは誰なのか。

みずえは疑問に思ったが、とにかく急いで家に帰り、避難者たちにそれを伝えた。

「本当に危険なら町や警察から連絡があるはずだ。様子を見よう」

しかし深夜、事態が急変する。数台のバスが、避難所になっている公民館に入って行った。

それに避難者の 1 人が気付く。バスの運転手は「避難者を移動するのだ」といったという。

当時、浪江町は、逃げ遅れた 20 キロ圏内の町民たちを津島地区までバスでピストン輸送していた。

しかし、みずえはそんなことは知らず、やはりここは危ないのではないかと思った。

みずえは寝ていた人々を起こし、再び議論となった。

多くは動きたがらなかった。しかし、一人の女性が「みんながいたら、菅野さん家族が逃げられないでしょう」といった。それで決まった。「車のガソリンが尽きるころまで避難しよう」

深夜 0 時すぎ、若い夫婦 2 組が出発した。2 月に生まれたばかりの乳児や、小さい子どもがいた。

夫婦は最初、「こんな深夜に山道を逃げるのはいやだ」と渋ったが、「子どもだけでも逃がしなさい」とみずえがいい、握り飯を持たせた。

翌 13 日の朝食後、再び話し合った。

前夜「逃げない」と言っていた若い夫婦連れが「子どものために逃げます」といった。

年配の女性が、夫婦に自分の車を貸した。「私は 1 人だから、避難所でバスに乗るわ」

夕方までには、25 人全員が福島市や郡山市、南相馬市などへそれぞれ再避難した。

3 月 13 日に菅野家の 25 人が出て行った後も、津島地区の避難者は大半が残っていた。

避難指示は 12 日 5:44 に 10 キロ圏内に拡大。1 号機が水素爆発した後、18:25 に 20 キロ圏内に広がった。

しかし官房長官の枝野幸男は 12 日夜の記者会見で、「放射性物質が大量に漏れ出すものではない。20 キロ圏外の地域の皆さんに影響を与えることにはならない」と語った。要するに、たいしたことはないが念のため避難してくれ、という趣旨だ。人々は 30 キロの津島地区は安全だと信じていた。

東電の社員が 12 日と 13 日に浪江町の津島支所を状況報告に訪れた。彼らは防護服ではなかった。「ここは危ない」ともいっていない。菅野みずえが会った男たちの様子とは大きく違っていた。

役場職員も区長も、みずえの会った防護服の男を見ていない。

しかし、みずえは見聞きしたことをしっかりメモに書きとめていた。

15日早朝、前日の3号機に続いて、2号機で衝撃音がし、4号機が爆発した。政府は初めて20～30キロ圏内の「屋内退避」を要請する。

津島地区の住民が避難したのはそのころだった。町長の馬場有らが14日の3号機の爆発をテレビで知り、隣の二本松市に15日から自主避難することを決めたのだ。

福島第1原発の正門では、15日9:00に毎時1万1930マイクロシーベルトの高い放射線量が観測された。それでも枝野の発言は楽観的だった。

「放射性物質の濃度は20キロを超える地点では相当程度薄まる。人体への影響が小さいか、あるいはない程度になっている」

「1号機、2号機、3号機とも今のところ順調に注水が進み、冷却の効果が出ている」

原子炉が12日のうちにメルトダウンを起こしていたことが国民に知らされるのは、後になってからだ。

12日朝、浪江町で交通整理などにあたる警官が、防護服を着用した。

「警官はなぜあんな格好をしているのか」住民は不安を抱いた。

浪江町議会議長、吉田数博は津島地区の警察駐在所を訪れ、「不安を与えるので防護服は着ないでほしい」と要請した。

吉田はいう。「知らないのはわれわれだけだったんだ」

福島県は、事故翌日の3月12日早朝から、各地域の放射線量を計測している。

同日9:00、浪江町酒井地区で毎時15マイクロシーベルト、高瀬地区では14マイクロシーベルト。浪江町の2地点はほかの町と比べて異常に高い数値を示した。1号機水素爆発の6時間以上も前で、近くには大勢の避難民がいた。

これらの数値は6月3日に経済産業省のHPに掲載された。

しかし、HPにびっしり並ぶ情報の数字の中に埋もれ、その重大さは見逃された。

8月末、浪江町の災害救援本部長、植田和夫にそれらの資料を見せると、植田は仰天した。

「こんなの初めて見た。なぜ国や県は教えてくれなかったのだろう」

菅野みずえはいう。

「私たちは、国から見捨てられたということでしょうか」

.....

『DAYS JAPAN』Vol.9 No.2 2012 FEB 「原発事故報道・検証 3月11日 -- 12日 (監修 広河隆一)」
64頁 「とてつもなく軽い命」 広河隆一 を参考に

『裸のフクシマ』(講談社)の著者たくきよしみつさんは「プロメテウスの罫」を紹介し、「国より早く3月12日朝に、県は自ら空間線量を調査し、北西方面大汚染を知っていた！」と題する文をブログ()に発表している。 阿武隈 (原発30km 圏内生活) 裏日記 [福島県は県民を見殺しにした -- 2011/10/16](#)

国より早く3月12日朝に、県は自ら空間線量を調査し、北西方面大汚染を知っていた！

朝日新聞に前田基行記者が『プロメテウスの罫』という記事を連載している。

この記事の中に、驚くべき記述があった。

.....

// 福島県は、事故翌日の3月12日早朝から、各地域の放射線量を計測している。

同日9:00、浪江町酒井地区で毎時15マイクロシーベルト、高瀬地区では14マイクロシーベルト。浪江町の2地点は、ほかの町と比べて、異常に高い数値を示した。1号機水素爆発の6時間以上も前で、近くには大勢の避難民がいた。

これらの数値は、6月3日に経済産業省のHPに掲載された。しかし、HPにびっしり並ぶ情報の数字の中に埋もれ、その重大さは見逃された。//

.....

最初これを読んだときは、時系列が間違っているのではないかと思った。3月12日早朝といえば、1号機が水素爆発する前のことだ。その時点ですでに15μSv/hなどという数値が観測されていた？ しかもそれは県が計測していた？ 何かの間違ひではないかと思ったが、本当だった。この元データは、文科省ではなく経産省のサイトに今も置いてある。普通にはなかなか見つけれられないような場所で、最初からそこにあると知らなければまず気がつく人はいないだろう。

これだ。

[経産省トップページ](#) > [報道発表](#) > [過去の報道発表](#) >

2011年6月3日 東京電力株式会社福島第一原子力発電所及び福島第二原子力発電所周辺の緊急時モニタリング調査結果について(3月11日~15日実施分)

翌3月13日には、南相馬市原町区、小高区の数か所で計測限界の30μSv/hを振り切るとんでもない数値が計測されている。

経産省のサイトに掲載されたのが6月3日。それまで3ヶ月近くこのデータは隠されていたことになる。重要なのは、この計測は国ではなく福島県が行っているということだ。

文科省がサーベイカーを出して原発から北西20km地点に走ったのは3月15日夜のことだ。県はそれより3日も早く、1号機が水素爆発する前に、県内が大変な放射能汚染をしていることを自らの調査で知っていたのだ。(中略)それでも県は、原発の周辺自治体に何の指示も出さなかった。しかも、この、重大な放射能漏れを日本でいちばん早く察知していたであろうデータを隠してしまった。

これはもう、未必の故意による殺人罪に匹敵する犯罪と言える。

福島県は、県民の命を守るつもりがハナからなかったのだ。

.....